# 市民科学通信

## 11 2025 No.66

【本の紹介】　ジェイミー・バートレット『操られる民主主義』
草思社文庫、2020 年 ・・・・・・・・・・・・・ 三宅正伸・・・０２
【捨てられなかった布達】唐草模様 ・・・・・・・・・・・・・・ひとりごと・・・０５
「短い秋」雑感　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・中川在代・・・０６
人災のコメ不足 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・塩小路橋宅三・・・０７
近況短信：ファンタジーにある老い　・・・・・・・・・・・・・・宮崎　昭・・・１０
―団地タクシー奮闘記「天真爛漫なおじいちゃん」の巻（３６）―
野枝さんの「構想力」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・宮崎　昭・・・１２
＜日常の出会いエッセイ＞
ZOOM 設定と『農民哀史』回想 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 眞島正臣・・・１５
―活字人間のデジタル活用の苦戦―
風刺精神の衰退と自己家畜化社会に抗して・・・・・・・・・・・ 小山昌宏・・・１９
―現代における批評精神とは何か―

**2025 年 11 月 28 日発行**
**発行：NGO 市民科学京都研究所**
**事務局 E-mail: sigemo.nao@gmail.com**

# 【本の紹介】
# ジェイミー・バートレット『操られる民主主義』草思社文庫、2020 年

三宅正伸

街歩きでは町並みを堪能しつつ思わぬ発見もある。立ち止まって思いにふけっていても町並みは消えていかない。それを新幹線で景色を楽しもうとすると通路を全速で走らなければならない。止まっていると景色はどんどん消えていくのである。リニア新幹線では遠景すらも楽しむことはできないだろう。無駄な努力と言えばその通りであるが、「赤の女王」が言うように走らないと景色は止まってくれないのである。軍拡競争などは同じ位置に止まろうとすれば、競争者と同じスピードを維持しなければならない矛盾が存在する。日本の政治は新幹線の背景のように急速に入れ替わり、立ち止まって考え直すことすら許してくれない。アメリカの原子力空母においてトランプの横で飛び跳ねている日本の首相を見ていると、まったくこれでよいのかを考えさす。かつてアメリカの原子力空母の日本寄港に抗議デモをしていた時代があったはずである。民主主義は時代によって変化するのかもしれないが、それを進化と呼んでいいのだろうかを考えさすような著書がこの本である。

デジタルの功罪を説きながら、パソコンで原稿を書き、ネットで資料を検索している。そのテクノロジーを頼みにしているが、それでよいのかも疑っている。チャーチルは「民主主義は最悪の政治だ。これまで試みられたすべての政治体制を除けばだが」と言った。民主主義とは基本的に検討に次ぐ検討を重ねていくアナログなのである。ネット配信について無料で受けられるが、その見返りはユーザーのデータなのであることを忘れてはならない。アルコールやタバコ依存からネット中毒が取って代わられている。ネットやスマホなしでの生活は考えられないと思う人が増えている。

この情報のパノプティコンでは看守は一人ではない。誰もが他人に目を凝らし、同時に誰もが他人から観察されている。選挙すらも候補者選びのアプリがあって、自分の意見と好みをインプットすると、コンピュータが政党を選んでくれる。このようにいったんコンピュータに頼るとやめられなくなる。それを「モラル的特異点」と考え、このようなシンギュラリティは今世紀半ばには必ず生じる。このように失敗のないアルゴリズムに全てを任すことは賢明かもしれないが、それはもはや民主主義ではない。

政治的不調和において部族化して過剰に党派的になる傾向がある。つまり、指導者を崇拝し集団に対する忠誠を示すために、敵対者の失敗をことさら煽り立てて妥協をしない。現在起こっている現象ではトランプ支持者に顕著であるが、問題は政治の商品政策化である。そのことにより政治的に再び部族として結束することが生じている。集団で考えることで狂気に駆り立てられ、正気化する気配すら見せない。同じ意見や好みの集団に個人が埋没してし

まう「フィルターバブル」や「エコーチェンバー」現象が「フェイクニュース」の氾濫を招いている。そこでの政治上の帰属意識創造は深刻な問題と言えよう。同じような問題意識や怒りを感じている者を容易に見つけ出すことができて、部族の一員となれるのである。属性の同じような者同士が群がり、このような部族主義は最後には排他的になって民主政治に潰していく。以上なことを誘導するためにSNSを有効に使い始めたのがトランプである。トランプはツイッター中毒者であって、物事を単純化することの天才である。彼の支持者は、彼こそが四面楚歌に陥った我が部族をリベラル派やイスラム勢力、メキシコ人の脅威から救うことのできる救世主と認めてしまうのである。その観点からは彼こそが敵を創ることによって支持を広げる強者なのである。それが白人のアイデンティティに連動した大統領選での投票行動になったのである。

真実よりも感情、客観性よりも先入観のメッセージによって支持が拡大していったのである。たとえばフォードの顧客はトランプ支持者になり得るとの考えから、ターゲットとしてこれまで棄権していた有権者の掘り起こしを徹底したのである。銃の購入者や国債の利回りに関心のあるヒスパニックで棄権している層は「説得可能」のターゲットとなった。フェイスブックへのトランプの投稿は、専門のコンサルに任せて「私を信じてほしい」を連発するトランプ本人からの投稿に見せかけたのである。矛盾する発言を何百回と繰り返し、論点をぼかし、状況に応じて変身するのである。これからの政治家に必要なことは誠実さよりも、理念がなくても嘘を平気でついて支持者を熱狂させる能力なのかもしれない。このような情報合戦ではプーチンもトランプに引けを取らない。現実にアメリカの大統領選にはプーチン率いるロシアが関与していたと言われている。2014年のウクライナのクリミア半島占領に関しては、ヨーロッパの極右政党や極左政党までも偽情報を駆使しての抱き込みに成功し、そのノウハウを反ヒラリーキャンペーンとして情報配信した。ヒラリーの私的な電子メールのハッキングから、トランプこそが草の根運動の支持者というような錯覚を生む情報操作を繰り返した。アメリカは資本主義による自由の国であるため、資金さえつぎ込めばフェイク情報の有料広告もフェイスブックやグーグルでは可能で、これがトランプ陣営とロシアとの共謀であると言われている。2016年の大統領選挙における情報戦争を制したのはトランプ陣営であった。そのようなことをアメリカのマスコミすら予想しておらずにヒラリー優勢を開票までコメントしていた。ヒラリーは開票が進むにつれて総投票数では上回っているものの選挙人での敗北を認めざるを得なかった。トランプ陣営がここぞという人たちに的確なメッセージを伝え、ふさわしいタイミングで届けた結果であった。そのメッセージがファクトかフェイクかは問われることもなく選挙結果がすべてとなった。

デジタル・テクノロジーによって寡占から独占に進む可能性が高い。デジタル市場においてはたった一つのサインで完了だからである。それでも限られた小規模企業は生き残る可能性もある。アマゾンは物品販売からプラットフォームの支配の段階に至っているが、この巨大テクノロジー企業は反独占の動きから小規模ベンチャー企業との同居を選択する。つまり、アマゾンの競争優位は本の豊富な品ぞろえではなく、本の売られている場所の支配となる。つまり、アマゾンが価格と条件を決めることを呑む小規模企業が存在することとなる。そのような社会となると、地域に根差した活動で経験を積む市民よりも、安易にネット上の抽象論を論じる市民が多くなる。幼児化した消費者市民は操られたように安い商品やサービスを追いかけるようになる。つまり、ネットでつながっていても孤独な市民なのである。デジタル・テクノロジーは技術の一部分にすぎないのに経済を支配するようになる。巨大テクノロジー企業はもはやロビー活動や競合他社の買収など考えなくてもよい。ひっそりと私たちの

心の中に入り込み、彼らなしでの世界は想像もできなくなってしまうのである。

民主主義とは強制を強いるシステムとの見方もある。国家は課税や表現の自由の制限など強制力を行使するからである。政府は情報を管理することによって強制力のシステムが整えられていく。その強制力の根拠となる法律は国民の意思が反映されているのであろうか。ヘイトスピーチや違法なプロパガンダもネット上ではネット全体が消えない限り取り除かれることはまれである。少なくとも法的に削除要請してもそれまでは残っている。つまり、フェイスブックも進出した国の法律に従わなくてはならないが、削除するのは自社のサーバーからなのである。ビットコインなどの仮想通貨がネット上で活躍しているが、政府は収入を特定できないことによって課税が不確かになっている。ネットでの情報は質も量も向上するが、その恩恵は不平等である。中国政府は各個人の「社会信用システム」によりスコア化している。技術と権威主義が結びついた事例である。テクノロジーの発展に順応できないとして民主主義さえ消えていくかもしれない。つまり、テクノロジーが民主主義システムの支配を脱すると、ディストピアとなるのである。

この本を読み切った後に思い出したのが、ダロン・アセモグル＆ジェームズ・A・ロビンソンの言うところの独裁と無法の間で「自由」が生まれるである(『自由と国家上・下』ハヤカワ文庫)。中国が国家にシフトした独裁であったならば、アメリカは社会にシフトした無法である。つまり中国は専制国家となり、自由を制限する国家監視の上での国民への利益を与えるもので、民主主義国家の論理とは相違するのである。一方、アメリカはポピュリズムと呼ばれる社会の力が国家による法的規制を上回り、「言った者勝ち」の無法状態となっている。この状態では両国とも国家の力と社会の力のせめぎあいによる「赤の女王効果」でより高次の民主主義への道が閉ざされているのである。日本での排外主義の横行は悪い意味での社会の力の強大化で、国家による法的規制がなければやりたい放題である。少なくとも「日本人ファースト」などを主張する政党が議席数を増やすようなことは民主主義の危機と考えなくてはならない。

詳しくは毎月第一日曜日 13 時 30 分(12 月は 7 日)から冬水庵(堀川丸太町一筋北の通りを西に入った北側)にて開催している『ともいき塾読書会』で報告するので参加期待である。

(みやけ　まさのぶ)

## ともいき塾・読書会案内

日時；2025 年 12 月 7 日（日）13:30～16:00
場所；冬水文庫（上京区講堂町 231）
内容；
１）【紹介】ジェイミー・バートレット『操られる民主主義』草思社文庫（三宅正伸）
２）「世界の今、この１年」（中川在代）
３）【創設】「非武装永世中立の日本をめざす市民の会」について（重本直利）

# 【捨てられなかった布達】

# 唐草模様

ひとりごと

友人が古い家を片付ける事になり、先代、いえ、それ以前から押し入れに寝り続けていた古い着物、帯、すり切れた布など、様々な捨てられなかった物達を私が引き受ける事になり、友人、知人に声をかけ、それぞれの方が使えそうな物を持ち帰ってくださいました。

私は人によって気になる物、必要な物が、これほど、違いがあるのかと、少々の驚きを感じました。そして、残った布の中に誰のもとにも、いきそびれた未使用の唐草模様の布がありました。

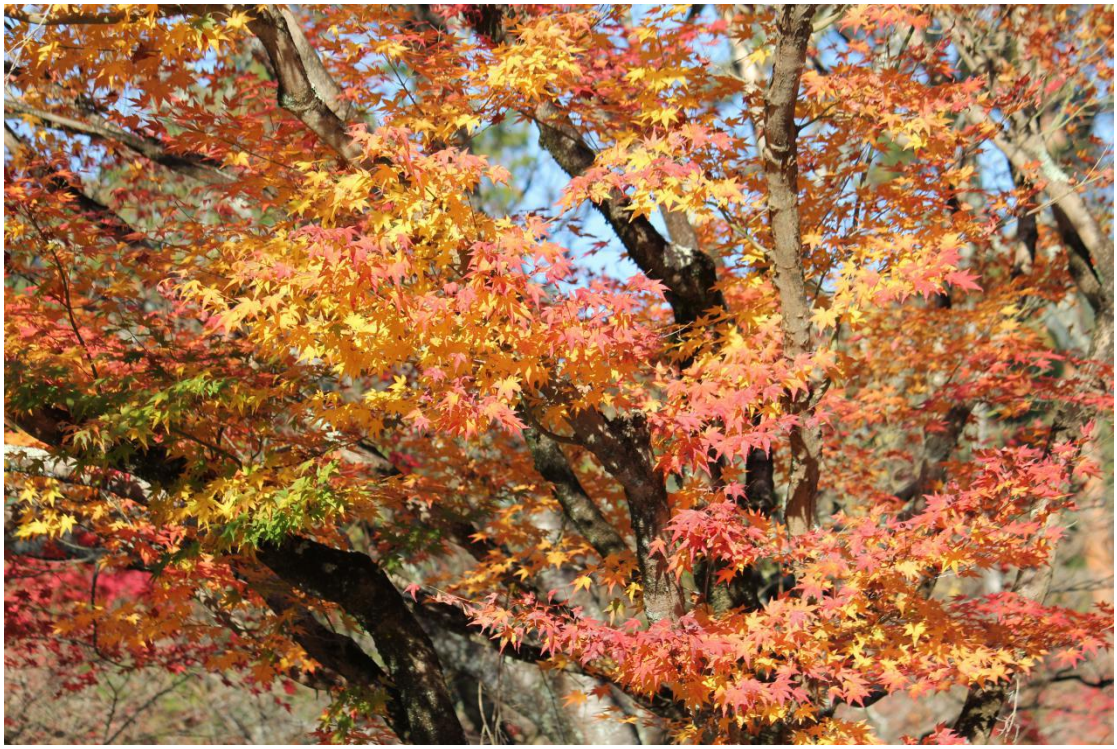
私も、とりあえず、使うあてはみつからなかったのですが、眺めていると、なんともいえない懐かしい布に見えてきました。昔は家の中で普通にみかけた唐草模様の布、とりあえず回りを縫って小さな風呂敷にしました。

捨てられなかった布達を、捨てられない私が引き継ぎました。

益々我家は倉庫？物置？状態です。唐草模様、朝日新聞 2025 年 11 月 3 日、しつもん！ドラえもん！によると、力強くつるを絡ませ延びてゆく様はおめでたい模様との事でした。唐草の布サイズ 85×100 など、私には多すぎる量があります。

御入用の方がありましたらお知らせ下さい。布が高価だった時代に大切に継ぎはぎをして使ってきた布を見ていて、簡単に捨てられる物は手に入れてはいけないと益々思いました。

（ひとりごと）



# 「短い秋」雑感

中川在代

夕焼けは天の微笑み鍬洗う　　前橋市　山本和裕　10/12　朝日俳壇
「読書の秋」　短編にしてください―小さい秋　埼玉県　この日暮らし　11/11

居座り続ける残暑の中、急な寒暖差に戸惑う体で、畑仕事は繁忙期を迎えた。高温と虫害で遅れた種蒔き、その後の世話と平行して、玉葱・エンドウ・ニンニクを植付ける畝を準備しなければならない。成育期間が長く、植付ける量も多い。連作を嫌うものもあり、来年の予定も、考慮する必要がある。
丈高い草を刈り（１枚ずつ黒マルチを外して）備中で上を起こし、平鍬で砕き、草や枯れ草、大きな石を取り除き、高さ・幅を考えつつ畝を作っていく。元肥を入れることもある。
土を耕していると、地球の歴史や先人の作業に想いが及ぶ。地球上の表土は希少、日本では手を抜けば忽ち草原に、有機物を入れながら作物を育て続けると土が変化してくるのを実感できる。防獣ネットで囲み、重機を避けると、畝作りは鍬頼みの力仕事、休み休みが原則で無理はできない。手袋をしても掌にタコができ、手や衣類、道具に付着した土は中々やっかいである。夕方には川の水で手を洗う（鍬は中々洗えない）。

夏野菜は苗を買って植付けることが多く、茄子・唐辛子・南瓜を除いて成育期間が短かく、支柱立て・摘心・施肥・土寄せ・水やり・鳥獣害対策・草取りに追われ、収穫作業もせわしい。日持ちも良くない。
秋冬野菜は、一部葉ものを除いて、種・豆・芋（自家採集）から一貫して育てる醍醐味がある。成育期間が長く、低温・積雪・強風の害、動物の侵入はあるが、施肥は２～３回・（エンドウは棚作り）・春先の草取りはあるが、厳冬期、草の勢いが削がれる間「草休み」の恩恵に浴することができる。
機械化、デジタル化、省力化が主流の中、敢えてひとり、好きなように地べたと関われる幸せは無上である。

畑仕事に通い始めて 20 年近く、肥料の使い方が少し会得できてきたように思う。味の悪い芋、硬いネギ、巻かない白菜、変色するほうれん草、成長しない人参・・・育て方の資料はあっても読んで生かすことができない。肥料過多の情報もこびり付いていた。が、物価高の中でも安くて使い易い肥料はある。成育状況を見極め、天気予報とにらめっこしながら肥料を入れる。成長した葉を折らないようにそっと屈んで。

畔の草刈りをしていた弟が軽トラで畑に寄り、二言三言喋り、スマホを取出し孫の画像を見せてくれる。「何か野菜要る？」確認するタイミングでもある。
今度の「草休み」、伝統の茶所で希少な種を作り続けている地域の茶を味わってみたいと注文してみた。楽しみである。

（なかがわ　すみよ）

# 人災のコメ不足

塩小路橋宅三

今から約 30 年前の 1993 年、「平成の米騒動」と称せられるコメ不足が生じた。当時の細川政権はインディカ種のタイ米などを緊急輸入して何とかこの危機をしのいだ。日本の炊飯器ではタイ米は美味しく炊けずに、消費者は焼き飯にするなど知恵を働かした。日本ではタイ米はまずいとの先入観が生じたが、タイでは日本のためにコメ不足が生じたと言われている。今回は備蓄米の放出などの施策が評価されたが、消費者は高くなった米を購入する羽目に至った。今回は「平成の米騒動」の時の教訓が生かされていないのが実情で、人災ともいわれるコメ不足が再び市民生活を直撃した「令和の米騒動」である。考えてみれば、日本の農政が大きく揺らいでいる人災ともいえる出来事を思い出す。まずは 1967 年のコメの自給達成であるが、コメが増産されているのに消費が減少していく傾向を示しているための減反政策の出現である。これはパン食や麺類での小麦が幅を利かしたからである。肉食には小麦の加工品とミルクというアメリカの占領政策が、国民の食生活を変えてしまったのである。次は 1978 年の減反から転作に舵を切った「水田利用再編対策」である。集落にノルマを設定し、休耕田や転作田を奨励したのである。そして 1993 年の関税撤廃を前提としたミニマム・アクセス米と称する減反や転作の継続の中での輸入米の設定である。皮肉にも同年には前述のようなコメ不足が生じていたが、銘柄米は高い価格で自主流通していたのである。1995 年にはザル法と称せられた食糧管理法は廃止された。そして 2009 年成立の民主党政権による農業者戸別所得補償制度である。これは水田に関してのアメとムチ政策のうちムチをなくしたものである。農家の飯米以外のコメには補助金で所得補償するといった政策であったが、基本的にコメを作らせないための政策に変わりない。補助金がなければ存在しないコメ作りが、自民党による政権奪取後も継続されることとなる。現在では物議を読んでいるコメの先物市場開設とともに、銘柄米よりも廉価なカルフォルニア米が消費者の飯米としてスーパーに並んでいて、外米はまずいというイメージが払しょくされている。将来的には日本とアメリカの国内コメ消費量が逆転する可能性すら言われている。日本人の主食は何であろうかを考えさせられる将来の幕開けである。

今回のコメ不足による価格高騰は経済学的には需給バランスの崩れで説明できる。国が主食であるコメの管理を備蓄米とミニマム・アクセス米に限定しているため、それ以外のコメの需給均衡が市場において 2000 円で均衡していたものが、需要に対して供給量が追い付かなかったために二倍以上の均衡価格となったと説明できる。現実に町中の米穀店では売るコメがなかったのである。誰の責任かを問えば、生産者から消費者に至るまでの流通過程の全員にその一端が存在するのである。1974 年の狂乱物価と称せられる異常事態でトイレットペーパー獲得に市民が奔走したことの再現であるが、トイレットペーパーの時のようなデマからの混乱ではなく、政治的に減反政策の破綻が示した本質的な問題なのである。急遽任命された小泉農相はコメのある情報を伝えることで価格上昇を鈍化させることは成功したよう

であるが、備蓄米以外の銘柄米は今なお高価格にとどまっている。消費者もコメの価格は安いほうが良いわけであるが、安いものを追いかけているうちに本質的なことが忘れられていくのである。日本人がコメを主食として考えるならば、それにふさわしい政策の持続性が必要だったのである。ネコの目のような場当たり的な弥縫策が喉元過ぎれば熱さを忘れるとなるのである。今日の世界においては、食糧はミサイル以上の戦略物質であることを忘れては高価な兵器によって国民は飢えるのである。それ以上に危険なことは、今回のコメ不足を利用して安全保障と称しつつ国家権力強化の媒介となることである。備蓄米放出で国民生活を救ったような虚構の裏には資本主義の矛盾が隠されているのである。

減反政策の矛盾は本来飯米であるコメをコメの転作作物にしているところである。コメそのものを主食として考えることへの挑戦で、それを原料としてお菓子の原料や家畜の飼料とするとするならばよろしいとのことで、これならばコメ不足が生じたときに、無理をしてでも加工原料米を飯米とすることも可能であるという理屈である。コメを主食と考えている日本人はコメの加工品である餅やかき餅を主食との代替品とは考えにくいのである。家畜の飼料となる予定の政府備蓄米が飯米とした経緯を考えれば理解できるだろう。コメについては小麦と相違した食糧であると言う認識が必要である。小麦そのものを主食とせずにパンや麺類に加工して食べていることとは相違するのである。また、加工品にしなくても主食となると言うことは保存のための添加物も不要であるはずなのである。それがコンビニなどにコメ商品となって並ぶ際には判読困難な食品添加物の表示がなされている。またそれが美味いと言う麻薬なのである。果たして美味ければよいのであろうか。

米穀通帳での統制品であったころからのコメ流通での主役は政府であった。食管制度の下では政府が買い上げることが前提であったが、今日では JA 農協が主役の役割を担っている。生産者は集荷者である JA 農協に持ち込み、JA 農協は卸売業者へ、卸売業者はスーパーなどの小売業者へ、そして小売業者は消費者に販売するという複雑な経路で農産物は商品となって消費者の口に入る。その都度、経費及び流通コストとマージンが加算されることとなるが、コメの価格は純粋な市場価格でなくて、JA 農協と卸売業者との価格で決まっているのである。生産者に対して JA 農協は仮払いとするが、コメの価格が上昇すれば生産者は高く買い付けてくれるところにコメを流すことは想定内のことである。そこでの農水省の計算では 2023 年生産量 661 万トンから 2024 年生産量は 679 万トンならば 18 万トンの増産である。さらに 2024 年の集荷量は前年より 21 万トンも少なかったために値上がり待ちのコメがあるはずで、コメが不足することはありえない計算となる。そこで農水省は卸売業者が隠匿しているようなニュアンスを貫いていた。結局、備蓄米 100 万トンの八割以上を放出することになるのであるが、いまだに「隠匿米」の存在は確認されていない。このような泥縄式の政策よりも、コメの需要を喚起するような政策がより重要なことは言うまでもないことである。JA 農協は決して悪玉ではなく、その資本主義的商社化が問題なのである。本来の協同組合の姿に戻るべきで、「公助」「共助」「自助」の共益的部分を前面に出すべきなのである。そうでないと消費者のコメ離れ自体が加速することになる。繰り返し述べるならば、主食であるコメについては政府の政策的役割と、協同組合本来の共助に徹した JA 農協の役割が大きく、政府備蓄米を放出を決定した農相は救世主の英雄ではなく失政の責任者なのである。

現在の食糧事情を顧みれば、カロリーを高くするための砂糖と油まみれの食生活に陥っている。一度経験した生活習慣は麻薬のように「やめられない味」に取りつかれていて、美味

しいと感じるように条件づけられているのである。シンプルにコメを炊いただけのご飯に飽き足らずに、かやくご飯や焼き飯、さらにコンビニのおむすびのように調理されたものを好むようになってきている。もはや生活を支える主食としての感触ではない。コメですらこのような状態になっているが、お菓子のような菓子パンや国民食であるラーメンも高カロリー化の一途をたどっている。様々な加工食品は日々の生活を豊かにしてくれたが、飽食の時代と言われる状態はますます進んでいる。これに手軽なインスタント化がこの傾向に拍車をかけることになり、付加価値をつけたインスタント食品のグルメ化現象すら生じている。世界の飢餓状態をしり目に日本の砂糖と油の食生活は肥満をもたらしている。健康を考えた禁煙が進んでも、高血糖と高血圧の生活習慣病から抜け出すことは至難の業となってきている。このように主食としてのコメがなくても大丈夫とした風潮は、戦後の学校給食からの流れであって、日本人の食生活に対する遺伝子としてしみついているのである。

さて、今後の人災のコメ不足を考えてみると、2022 年の改正種苗法の施工により、登録品種の種の農家による自家採種が取り締まられることになったことは見逃せない事実である。早い話が種の商品化により種苗業者の「金儲けの種」になったのである。コメ、そしてその種は地域の宝であったと考えられるのであるが、資本主義における商品化は例外なく襲ってきている。そこで京都ならではの農政で、現在あまり話題ともなっていないのがいわゆる「京都食管」である。前述したように食糧管理法が形骸化して減反政策にウエイトがかかる状況下で、元京都府知事の蜷川虎三は 1978 年のまでの在任中に政府買い入れからはみ出すいわゆる「余りコメ」に対する京都府独自の価格補償制度を展開していた。国の減反政策では予定限度数量以上のコメを作ったならば、翌年に集落単位にペナルティとして予定限度数量から差し引くような徹底ぶりであった。また、消費者運動の高揚によりいわゆるヤミ米を、地域の生協と産直関係に導くような動きもあった。国家統制による管理経済でもなく、市場による自由経済でもなく、コメ問題についても地域のことは地域で守る姿勢を示すことが、このような人災から生活を守ることになるのではないかと考える。今回の直接の原因は猛暑による高温障害不作なのかもしれないが、それに対する対応にてそれぞれの思惑が人災を招いたと考えられる。もう一度最後に一言、失政の責任者である農相が実施したの備蓄米放出による政府買取価格と売り渡し価格の逆ザヤの原資は国民の血税であり、国民は税金を払いつつ経年劣化のコメを食わされるのである。このような逆ザヤはかつてのように新米においてなされるならば、生産者への所得補償として国民の納得も得られるものであるが、救世米のように古米・古々米を振る舞う政府は決して正義の味方ではなく、人災の張本人であることを明確にしておきたい。

（しおこうじばし　たくぞう）

# 近況短信：ファンタジーにある「老い」

## ―団地タクシー奮闘記「天真爛漫なおじいちゃん」の巻―（36）

宮崎　昭

この「団地タクシー」を運転しているのは、この 7 月 77 歳になったキャリア 8 年になろうとする老人です。

タクシーを利用している人たちも老人です。いわば、ローロー（老老）相互扶助の泣き笑い報告です。

ここで「タクシー」と銘打っていますが、電動アシストのついた、重さ 100 キロ近くある三輪自転車です。ヒトとモノを乗せると自身の体重もあり、かなりの重量になって、ペダルが相当重くなります。坂道があるから余計大変です。「開業」して 12 年以上になりました。

数か月前、沖縄から転居してきた 80 歳代のおじいちゃんの存在感がすごいのです。当初、団地の施設や住宅棟、1 街区 15 棟、2 街区 12 棟、3 街区 10 棟の位置関係がよく分からず、迷子になったこともありました。私たちに質問攻めをするのですが、やっぱりというか、翌日には同じ質問が飛んできます。喉の奥にしまい込んでいるのは、「それは昨日説明したでしょう！」なんですが、これはここでは絶対禁句でして、あたかも初めて聞いたような態度で、また同じように説明をします。記憶力もさることながら、脚腰も相当弱っているので、この団地タクシーは“神か仏”のようにありがたがって、毎日のように利用してくれています。

なぜ沖縄を出て、八王子にやって来たのかについては、よく分かりません。何らかの事情があってのことだと思いますが、それを本人に聞く人もいません。ひとり、終の棲み処と決めたのでしょうから、相当の覚悟があったのだと思います。その思いが時々、表にでることがあります。外で団地タクシーを待っているときなど、急によく響き渡るテノールの歌声が、メロディーはないのでまるで雄叫びのような大声がおじいちゃんの口から飛び出します。合唱団にでも所属していたのかと思わせる見事な声量です。

§

それはそれで納得していますが、どうにも腑に落ちないことがあります。
このおじいちゃん、I さんといいますが、決まって「迎え」と「送り」があります。いずれも所要時間は 10～15 分程度です。「迎え」は電話での要請に従って運行し、「送り」は買い物などを終えた後に、本人が直接申しでてきます。問題はその時間なんです。

団地タクシーは午前 11 時から午後 3 時までの 4 時間運行ですが、I さん、「お迎え」コールは決まって午後 2 時過ぎ、そして「送り」の申し出は午後 3 時ぎりぎりになることがあります。大方の利用者は 11 時から 2 時までの間で完了します。でも I さんは終了間際の利

用です。決められた時間内ですから、何ら問題ないのですが、運行終了しても後片付けで20分はかかります。付け加えると、3時前ギリギリに来る人があと3人ほどいますから、この人たちを受け入れるとすれば、すべて終了するまで40分以上かかります。勝手な言い分ですが、ギリギリは勘弁してほしいというのが本心です。

一度お尋ねしたことがあります。

私：「もう少し、たとえば1時から利用することはできませんか？」

「買い物するにも、ゆったりと時間をかけられますよ」

Iさん：ゆったりした態度で「いやー、洗濯があるんでこの時間になります！」

私：「はー？」

§

ちょっと理解できませんでした。仮に洗濯物が乾いて取り込むのが午後2時だとしても、それならば洗濯を午前中にすませ、乾燥するまでの時間に買い物をするために団地タクシーを利用すれば良いと思うのです。自分なりの崩せないルールというものがあるのかもしれません。

那覇へは仕事や観光で数回行ってますが、ホテル泊りで生活体験はありません。沖縄の人たちが洗濯をどのようにしているのかは知りませんので、Iさんの個人的な性向なのかどうかも分かりません。ただ、ふっと思うことがあります。いわゆる「沖縄時間」というものです。

一度だけ体験し、その時に教えられたのですが、那覇市内の居酒屋で呑み会がありまして、開会時間になっても全員揃いません、しかし幹事さんはニコニコして「さーー、はじめましょう！」というのです。遅れてきた人も悪びれず、幹事さんも咎めるのでもなく、皆和気あいあいと宴は進行したものです。土地の言葉で“なんくるないさー！”ですね。

§

考えてみると、私はとんでもない間違いをしてしまったようです。というか、現代社会の非人間的な機械的ルールに呪縛されていて、“天真爛漫”に生活するスタイルをすっかり失っていたことです。Iさんのしぐさ、態度、表情に正直イラっとした自分を反省しているところです。

バスや電車が時間通り来ない、そんな場面で“なんくるないさ”とつぶやく「達人」になるまで、相当の時間がかかりそうです、私は。

＊「団地タクシー」は、八王子市内のUR大型団地内でボランティアによる運行を行っている三輪自転車です。

（みやざき　あきら）

# 野枝さんの「構想力」

宮崎　昭

＜新しい女には新しい女の道がある＞

「新しい女は今までの女の歩み古した足跡を何時(いつ)までもさがして歩いては行かない。新しい女には新しい女の道がある。新しい女は多くの人々の行止まった処よりさらに進んで新しい道を先導者として行く」（伊藤野枝[1913]「新しい女の道」『青鞜』第三巻第一（1 月）号、伊藤[2019]161 頁）。野枝 18 歳の覚悟、心意気です。

その「先導者」の道は苛酷でした。

「先導者は開拓しつつ進む間には世俗的のいわゆる慰安などはいささかもない。終始独りである。そして徹頭徹尾苦しみである。悶えである。不安である。時としては深い絶望も襲う」（同上 163 頁）。

なんとも悲壮な決意を胸にしまい込んだのですが、しかし、その彼女は官憲によって虐殺されました。1923（大正 12）年。大杉栄 38 歳）、橘宗一（6 歳）野枝（28 歳）の若き希望の人でした。

＜17 歳の苦悩 - 個人の自由＞

前年、『青鞜』第二巻第十一号に「日記より」と題された文章が掲載されています。福岡県今宿に生まれた野枝さんは家族や地域の“歩み古した足跡”と決別する心情を吐露しています。彼女は、あくまでも個人の自由な生き方を切望し、自身の将来を構想しているのです。いまなら“早熟な女性”と言われたかもしれません。

「そう一時の、間に合わせの妥協によっての平和が何時まで続こう。一時の平和を求めて後々まで苦しむより、まだ、死によって強く自己の道に生きる方がどのくらい、ましだか知れない」伊藤[2019]16 頁）。このとき、「死」ということを、抽象的にではなく具体的に構想していたかどうかについて、私は多少の疑問を感じるのですが、実際に権力による虐殺が起こったのですから、言葉がみつかりません。

個人の自由というのは、まことに孤独なものです。

「私はこうして独りはなれて、なるべく周囲の何物も耳にしないでつとめて、自分ひとりの気分をかばって一日いいそうした周囲に起る不快なくだらない紛紜(いざこざ)に耳をかさず心うごかさずおなじ気分で考え続くる事が出来たら何か意味のあるものをつかむ事が出来るような気が絶えずする」（同上 22 頁）。

そうは言っても、独りで生きてきたわけではありません。平塚らいちょうから請われて雑誌『青鞜』の編集責任を担うことになります。

＜女性が文章で発信する＞

この時代、女性が高等教育を受け、自分の考えを発表することは珍しいことでした。そんな中で話題となったのが、中條百合子であり『貧しき人々の群』でした。ところが、「文壇知名の諸家」の評価は芳しくなく、「その真っ正直な、美しい情緒と、何物にも妨げられぬ事実に対する感じと鋭い観察力、そういうものに対して、本当に敬意を払った人はまるでな

かったように私は記憶している」（伊藤野枝[1918]「彼女の真実―中條百合子氏を論ず」『文明批評』第一巻第一号、伊藤[2019]231 頁）。

個人の自由をモットーにする野枝さんだからこそ、中条の因習や父系性に囚われない「自由な発信」に賛同したのだと思います。野枝さんの個人の自由には、「他者」（中條）の自由がしっかり包まれています。この点は重大です。それとともに、中条のそれが「その真っ正直な、美しい情緒と、何物にも妨げられぬ事実に対する感じと鋭い観察力」を持っているという評価基準が示されていることに注目したいのです。これは三木清の「構想力の論理」そのものです。

＜『青鞜』のアソシエーション＞

20 歳という若さにして、『青鞜』の編集兼発行人となった野枝さんは、組織を統括する立場になって、個人の自由を再構築する課題を背負いました。実際、『青鞜』に対する世間の評判が好ましいものではなくなり、野枝さんたちと社会との間は没交渉となり、孤立してしまいます。野枝さん、自嘲気味にこう言ってます。

「私は自分で編輯するこの雑誌を、出来るだけ、立派なものにしたいと思います。けれどもいかに、私が自惚（うぬぼ）れてみましても本当に貧弱な内容しか持つことができません。…（中略）…目次にならんだ人達はまだ世間の表に立っていない人の方が多数を占めています。私は毎号毎号こうして貧弱だとかつまらないとかいう非難を耳にしながらも何時もねうちのない雑誌ばかり編輯しております。けれども私の考えではそれにも相当の理屈はつくのです。私自らはこの雑誌自身に単なる苗床としてより以上の何の価値をも求めようとはしません」（197 頁）。

野依さんは『青鞜』を決して自慢しません。「貧弱な内容」であることを率直に認めます。しかも執筆者の多くが無名であることも自覚しています。ところが、この無名の執筆者たちを排除して有名作家に原稿依頼することはしません。あくまでも、同志として「苗床」という視点から支えようとしています。力不足を批判し咎めるのではなく、今後の成長に期待するのです。孤軍奮闘、孤立の道を歩んだかのように見えますが、しっかりとしたアソシエーションの構築に傾注していました。

＜三木「構想力の論理」＞

何やら三木清が思いだされます。三木も権力によって獄死という最期を迎えます。野枝さんとの交流はなかったものの、なにか共通の課題を抱えていたように思うのです。

例の成功と幸福の話ですが、野枝さんは成功者とは思えませんが、幸福だったのでしょうか。

「純粋な幸福は各人においてオリジナルなものである。しかし成功はそうではない。エピゴーネントゥム（追随者風）は多くの場合成功主義と結び附いている」（三木[1986]75－76 頁）。

「愛するもののために死んだ故に彼等は幸福であったのでなく、反対に、彼等は幸福であった故に愛するもののために死ぬる力を有したのである」（同上、19 頁）。

野枝さんは「幸福であった故に愛するもののために死ぬる力を有し」ていたのでしょうか、考えてしまいます。野枝さんが幸福であったとすれば、その理由をどこに求めたらよいのでしょうか。それは、中条百合子の評価のところで述べたように、「その真っ正直な、美しい情緒と、何物にも妨げられぬ事実に対する感じと鋭い観察力」という姿勢にあると思うのです。

一見して無謀で傍若無人に映る彼女の自由な生きざまは、三木の表現を借りるならば、「構想力の論理」に沿うものでした。それは「ロゴスとパトスの統一」ということに尽きま

す。「知的なものと感情的なものとが一つに結び付いている」のであって、「構想力はつねに知的要素と感情的要素とを含むところに、構想力と単なる感情とが区別される」（三木[2023]第一、59 頁）わけです。構想力は単に観念のなかにあるのではなく、一定の「形」となる「創造の論理」であり身体を通じた「行為の論理」であります。

三木さんは、この「構想力の論理」を神話、制度、技術、経験というカテゴリーに沿って展開し、しかる後に「言語」にいたる構想をもっていましたが、不幸にして成就できませんでした。その言語の力こそ、創造的行為であり野枝さんが情熱を注いだ『青鞜』の活動だったはずです。

**＜「市民科学通信」と構想力＞**

ピリオッドを打つことになった〖市民の科学〗第 13 号で、故篠原三郎先生の言葉が見えます。「構想力」に深く関わるメッセージです。

篠原先生は、同誌（―『市民の科学）』のこと―宮崎））の創刊号の巻冒頭で「『苦海浄土』の魂に学ぶ」を書かれ、以下のような文章で締めくくられました。

> わたくしたちは、いつまでも、自分自身に対して座視しているわけにはいきません。あらためて『魂』を読み取れるような『市民科学』者になれるよう、務めなくてはと激しく感じられるのです（95 頁）。

篠原先生は，たとえば石牟礼道子や高群逸枝など火の出るようなパトスを高く評価していました。私たちの研究姿勢を見るにつけ、とかくロゴスに偏重しているのではないかと、危惧してのことです。

11 月 3 日に行われた最後の「所員会議」の折、ある理事がため息をついて“「市民科学通信」の投稿者が限られていて、広がらないんだよね。掲載された原稿に対しても反応はないし。残念です”とつぶやいていました。

野枝さんが語っていたように、「市民科学通信」も「苗床」なんだと自覚して、思い切って「構想力」を発揮することが求められているのではないでしょうか。

（みやざき　あきら）

**【参考文献】**

伊藤野枝[2019]森まゆみ編『伊藤野枝集』岩波文庫
三木清[2023]『構想力の論理』第一、第二、岩波文庫
三木　清[1986]『人生論ノート』新潮文庫
森 まゆみ[2001]『吹けよ　あれよ　風よ　あらしよ　伊藤野枝選集』學藝書林

＜日常の出会いエッセイ＞

# ZOOM 設定と『農民哀史』回想

## ―活字人間のデジタル活用の苦戦―

眞島正臣

「日々新たなり」という慣用表現がある。コロナ期に専門学校の講師を引退して以来、無職の身となり、外出も少なくなった。マンション暮らしの日々でありながら、何かと発見があり、独りよがりの感動を味わっている。何がそんに面白いのかと言われそうだが、表現下手な「令和つづれ草」を書いて、確かめて見たいと思う。先ほども、無呼吸性症候群の治療器具の通信機能が故障していると、オランダの家電メーカーフイリップス社の社員が来訪。新規の製品を持ってきて取り替えてくれた。診察を受けている富雄のＳ医院からの要請だったようだ。消費者が気づき要請するのでなく、医師の方からの要請という関係がスムーズで現代的だと思う。顧客管理が当然のシステムになっているのだろう。大阪の病院から転院したばかりである。

**１，思想の科学研究会の読書会＝主催者からオンラインで声が割れると指摘される**

晩年の読書生活でも、新たな分野の書物が選ばれるので毎月参加している。『西洋の敗北』（エマニエル・トッド著、文芸春秋刊）を読む機会を過去に与えられている。11 月は、『ギリシャ人の物語』（塩野七生著、新潮文庫刊）で民主主義のはじまりを考えようという企画である。読書の宿題の他に、私には、通信環境を整備してくれという要請があった。東京のＤ協大学教授のＹさんがアドバイスをくれて、受信環境の悪いマンションでの打開策を教えてくれていた。スマホの ZOOM を活用していたが、私の発言が明瞭に聞こえないという。そもそも、オンラインの設定をどうすれば完璧か理解していないのである。

**２，AU 新企画再契約営業の青年が突然やってきた。ZOOM ダウンドーロを助けてもらう**

外出しなくなったのに、次から次へと外から、新たな人物がビジネス目的でやってくる。まさに千客万来である。営業マンＮ井さんは、AU　UQ モバイルのキャンペーンカタログを持って契約更新の勧誘目的で来訪したのである。他社との競合で元々AU 使用の私を継続させるべく、「ネット＋電話」とセットで割引」という新システムを売り込んで来たのである。料金が安くなるという触れ込みに、他人が自宅へ入り込むののを恐れるのに、聞く態勢になっていた。契約更新の用紙に書き込んでくれというので、AU の下請け会社と分かっているのに、リビングの机へ座らせてしまった。とっさに思いついたのが、契約更新の手続きも終らないのに、「ZOOM のソフトをダウンロードしてくれないか」と依頼したら快く引き受けてくれた。ノートパソコン２台に作業してくれた。デジタルの修行は、子供の時代からですかと訊ねると、会社へ勤務してからですという。ちなみに再契約には、現在使用のルーターを取り替える工事などが予定されており、新しい設定になるらしい。実施する工程など説明を受けた。大まかに申せば、現在スマホの費用が６千円台であるから、初期のサービス割引が終わると４千円台になり、なるほど、安くなる。夕飯も済ませておらず、遅い時間になったが、世間話しているうちに「私は活字人間、君はデジタルを活かして、ビジネスを成

功させてください」などと、はからずも、説教していた。

**３，デジタル技術を活かして頑張ってと書斎へ移動。書棚の『農民哀史』の背表紙が偶然、目に留まる**

ZOOM をダウンロードしてもらったお礼をのべたのだが、相手にはご迷惑な話だが説教していた。読書に夢中であった過去の体験を語ったのだが、古本屋へ売ったと記憶間違いしていた書物が残っていたとは、驚いた。『農民哀史』へ意識が向いたのは、11 月３日からの心に残る大事なことであったからである。「市民社会研究会」の集会の懇談会で篠原三郎先生になにを学んだかという討論がなされた時点で、N 村先生から「先生から奨められて読んだという『農民哀史』を挙げられた。N 村先生の発言からだいぶ後に、『農民哀史』の著者を思い出せないと私が手を挙げた。N 村先生は、「渋谷定輔」と回答された。篠原先生が教授時代、私は出会っておらない。別々のところで、同じ書物に学んでいたことになる。偶然であるが、同時代ということだろう。

後日、ウイキペデイアを検索して、私の記憶喪失にあきれ果てた。

「渋谷 定輔（しぶや ていすけ、1905 年〈明治 38 年〉10 月 12 日 – 1989 年〈昭和 64 年〉1 月 3 日）は、日本の詩人、農民運動家。

埼玉県入間郡南畑村（現富士見市）出身。妻は渋谷黎子。子供の時から農業に従事、そのかたわら詩や生活記録を執筆。1925 年（大正 14 年）下中弥三郎らと農民自治会を組織し『農民自治』（創刊号のみ『自治農民』）[1]の編集にあたる。農民自治会埼玉県連合会として非政党同盟を率い、1928 年（昭和 3 年）の県会議員選挙にむけて活発に運動するも成果が挙がらず、渋谷は離脱。29 年に全国農民組合に参加、埼玉県連書記長となる。30 年中央委員。1937 年サハリン（樺太）からソ連に越境を計画して逮捕され、下獄。39 年出獄。戦後は新日本文学会に参加し、1955 年日本農民文学会の結成に参加、理事に就任。1970 年『農民哀史』を刊行、ロングセラーとなる。1982 年より思想の科学研究会会長」とある。私は、新日本文学会員であった。後に会は、終了。解散した。「思想の科学研究会」においては、現在も会員である。思い起こせば、渋谷定輔さんは、会長だつたのかなと思う。なぜ、ちゃんと、記憶していなかったのか恥ずかしい。『女工哀史』の著者と交流があったようで、『農民哀史』にも書かれている。若い日の渋谷定輔を現実と戦う小説のヒーローのように読んだ気がする。４３３頁に書かれたれた「マルクスは詩人だった」という文章は、みずみずしい。「彼は生涯を通じて詩と美術を熱愛していたと彼の伝記にしるされている。」とのくだりがある。詩人渋谷定輔の筆によるとマルクスもこうなるのかという思いである。『農民哀史』は、私には、労働現場を生きる辛さから救済された書である。

11 月３日に N 村先生からいただいた励ましの言葉は、「これから１０年がんばろ」という前向きなお声がけであった。この励ましは、人生の節目の記憶に残る贈り物である。懇親会の席であった。

**４，AU からの N 井さんが申込書遅いと再訪問**

N 井さんから渡された、「光回線をおトクに＝インターネットサービス」と書かれたパンフを読むも確かなイメージがつかめない。申込書に承諾のサインを入れ送り返してくださいと電話で N 井さに言われていたが対応が遅いので、直接、マンションへ再訪問してきた。ZOOM を設定してくれた営業マンである。申込書に印鑑を押した。これで工事をする日程を問い合わせしてきますよと、帰っていった。「スマホとセットでオトクな高速インターネット」の売り込み内容が分からず、疑心暗鬼とまでは、いかないが「まだ理解できない」と

答えた状態であった。利便性を体験できるようになるのだろうか。

**５，フェース To フェースの対話は、やはりすばらしい。台湾からの旅行者家族と環状線で盛り上がる**
**一人暮らしながら、地域包括システムの一環として**

お買い物ヘルパーの来訪は、火曜日と、金曜日。お掃除ヘルパーが水曜日、週一度来られる。水曜日の９時には、訪問看護士が来られる。この介護システムの人間には、薬を適切に飲むカレンダー仕立てで、持って来てくれる薬剤師も含まれている。「孤独死」などにならないように日々、確認ができるという手助けになっている。地域包括センターの介護マネージャーが指導しての支援システムである。日常の来訪の他に、今日、11 月 22 日には、奈良市の団体から夏物と冬物を入れ替える作業に夫婦で来られ、助けてもらった。数週間以前には、通販で購入したハンガーラックを組み立てる作業を依頼した。本日は、「前回と今回で 8 時間、少々お支払いが高くなりますよ」と言われた。

健康維持には、日頃の家計の始末ばかり言っておれない。とりあえず、助けて貰わないと前へ進めない。

先週、金曜日、会合の後、天満駅から環状線に乗り込んだ。ここで、楽しいことがあった。環状線に乗り込んだばかりの時は、足の踏み場もないぐらい不安定な位置で、吊革を掴んでいた。いくつかの駅に留まった後、降りる人が増え、座る席が空いた。私の前にいた男女交えた乗客が私に空いた席を譲るから座れと言ってくれた。背の高い中年男を中心に、お母さんらしい祖母と、男性の妻らしい若い女性。その姉妹らしい女性が台湾からの家族であった。背の高い男は日本語を話すので、お礼に日本に来られたのは、なぜと聞いた。「明日、勝尾寺に行きます」と答えた。「京都が観光客で混んでるから」と説明してくれた。「紅葉見物のついで箕面の滝まで行くといいですよ」と私。

台湾へ行きたいと思いながら、実現できていない私は質問する側に変わった。「飛行機で時間どれぐらい。」と聞くと、「近いですよ」と即く答えてくれた。彼らは、宿泊は、「玉造です」と言って環状線を降りていった。初対面でありながらにこやかで打ち解けた人々に内心感謝した。日本でいえば地方を旅行した時の人々のようだと、思った。政治の方では台湾問題で、日中間の意見齟齬から、圧力を受けているのだが、庶民の間で、なんのこだわりもない。電車の中の行きずりの話だが、人間対人間の直接対話は、やはり、有難い。なんの疑いもなく、呑気な情動を内面に抱き、書き綴るお目出たい無防備さを反省する次第である。

実施する工程など説明を受けた。大まかに申せば、現在スマホの費用が６千円台であるから、初期のサービス割引が終わると４千円台になり、なるほど、安くなる。夕飯も済ませておらず、遅い時間になったが、世間話しているうちに「私は活字人間、君はデジタルを活かして、ビジネスを成功させてくれ」などと、はからずも、説教していた。

**６．デジタル技術を活かして頑張りやと書斎へ移動。**
**書棚の『農民哀史』の背表紙が目に留まる**

ZOOM をダウンロードしてもらったお礼をのべたのだが、相手にはご迷惑な話だが説教していた。読書に夢中であった過去の体験を語たったのだが、古本屋へ売ったと記憶ちがいしていた書物が残っていたとは、驚いた。

**７．市民科学研究会で話題にされた書物　篠原三郎先生が推薦されたと中村先生**
**「高齢者の私を支援するため来訪の人々ー錦秋日記ー」**

１，文化の日

２，米を購入を依頼した弟夫妻
３，書道作品を速達で送る
４，近くの歯科へ。顔にヘルペスと言われ内科へ。
５，朝から訪問看護婦。
６，歌集の返事
７，Z00ｍの設定「農民哀史」見つかる
８，買い物
９，洋服ハンガーの組み立て

（まじま　まさおみ）

# 風刺精神の衰退と
# 自己家畜化社会に抗して

## ―現代における批評精神とは何か―

小山昌宏

**はじめに**

1980 年、今から 45 年ほど前、エドガール・モラン『時代精神Ⅰ　大衆文化の社会学』（みすず書房）を読み進めているときのこと、ふと得も知れない違和感に包まれたことを思い出します。まだ学術的方法論を身に着けていない大学浪人中の筆者はその書に「社会学」を感じることができず、はたと自分は他の多くの散文形式で記された同時代の哲学書同様、それを「批評」「評論」として読んでいるのではないかとの疑問をもってしまったのでした。それは 1970 年代後半、小松左京をとおして「未来学」に関心をもち、後に梅棹忠夫、川喜田二郎の本を読みながら、また大学入学後は唯物論研究会で『資本論』を読んでいるときも、先輩方には社会「科学」だと教えられながらも、「これは科学を越える、あるいは科学にいたらない社会的価値観の表明、探究の書だ」との直感に受け継がれました。それから筆者はマルクス批判の急先鋒であったカール・ポパーを独学し、社研ではウェーバーなどと読み比べ、3 名の論点の違いを大学ノートに記し、自分なりに社会「科学」とは何かについて、必死にまとめる作業へ向かうことになりました。

学部では木田元先生に西洋哲学を、須田朗先生、宮武昭先生にはドイツ哲学全般を、三島憲一先生にはフランクフルト学派について専門的に学んでいた頃でした。新宿で開かれていた芝田進午先生主宰のマルクス主義研究セミナーに参加するようになったのも 1981 年でした。そのなかで特に印象深かった回が、本多勝一氏が講師で招かれたときの「科学的認識と論述」の回でした。芝田先生と本多氏がルポルタージュの方法論と記述方法について認識の発展段階について論じてゆきました。このとき、マルクスの思考様式、いわゆるプラトンとは逆さまの「上向-下向」法の過程について、あるいは科学的認識における「現象論」「実体論」「本質論」、いわゆる武谷三段階論についてはじめて学び、自身のなかの「批評」と「科学」のつなぎ目がおぼろげながらみえたのでした。また後日、当時大学内で教鞭をとられていた宮原将平先生に岩崎允胤先生との共著である『科学的認識の理論』（大月書店）の自身の理解が行き届かないところをうかがいに尋ね、研究室にながながと居座ったことがありました（苦笑）。

こうして人文科学出身の筆者がおぼろげながら感じた「社会科学」への批判精神は、見田石介『ヘーゲル大論理学研究』（大月書店）をとおして、「科学」にこめられた政治的中立性、技術における価値中立性の問題にたどりつきました。それから三木清、戸坂潤の「批評精神」にたどり着いたのは 1983 年頃だったように記憶しています。それからというもの、サブカルチャー批評、研究を重ねながら、並行して社会情報学研究へとシフトするなか、その関心をようやく『情報セキュリティの思想』（勁草書房）にまとめることが叶いました。それは大学卒業から 30 年近くを経た 2011 年の出来事でした。それは個人的には自分のなかの問題が一段落したかのようにもみえもしました。

ところが、2010 年以降、急激な IT 社会、メタバースの進行、とりわけ 2020 年以降は

Society 5.0 を前提とするAIによる「LIFE3.0」構想が一般化するなか、筆者は再び人間の批評精神の衰退、風刺精神の無風化が急速に進展していることに危機感をつのらさざるを得なくなりました。そのこじれた批評精神は2023年には『批評なきカートゥーンのゆくえ―風刺滑稽画はいかに生き残れるのか？』（汎工房）を書かせるにいたりました。前置きが長く恐縮ですが、こうした精神活動の軌跡の末に、ここでは現在『情報セキュリティの思想』の続編にあたる『情報信頼の科学 ―情報の自己生成と社会習性』の構想にあたる動機付けの部分を記させていただければと思っています。

## １．批評の古典的定義

そもそも人類における批評は、個人的には「論理によって世界、社会、人間の健全性を保つ役割を果たす力を人々に与え、自ら未来世界の可能性を開くもの」と考えています。それは作品批評であろうと、社会批評であろうと変わることはありません。では批評活動は何時ごろからはじまったのでしょうか。それは古代ギリシアに起源をもつとされています。批評を意味する言葉、クリティークは「判断する」「裁く」を語源とする「クリノ（krinō）」に由来していることにもそれはうかがわれます。それはまたルネサンス時代に再興し、16世紀初頭、エラスムスの人文主義により顕著になり、17世紀の前半にはデカルトによりその活動は自由精神の発揚、判断力向上の機会をもたらしました。以降批評が文芸活動の一部門になり，職業的批評家が誕生したのはフランス革命以降の19世紀においてでした。批評が文学研究の枠内で始まったのも19世紀で、たとえばM.アーノルド『今日の批評』（1864）は英文学研究の一端として、批評を①文学作品に対する二次的立場（批評能力は創作能力に劣る）とし、②独立した学問とする立場をとり、③他の人文科学研究を基礎として広がるものとし、作品に対する解釈及び評価、批評をおこなう精神そのものであると定義しました。それに対し、オスカー・ワイルドは「芸術家としての批評家」（1891）で、一次創作に劣るものとされる批評について「真の批評家こそ創造的である」と批評の文化的価値を讃えました。しかしF.R.リーヴィスは反対に「ヘンリー・ジェームスと批評の機能」（1891）において、読者の文学体験こそが重要であり、批評が作品そのものの本質から逸脱することを戒め、過度の抽象化、象徴化に反対する姿勢をみせました。こうして20世紀には、T.S.エリオット「批評の機能」（1923）が批評について６つの役割をみいだすにいたりました。それは①作品についての表現（作品そのものではない）であり、②創作の従者、補助者として存在する役割を果たし、また③言葉により芸術作品について述べ、説明するものであり、④読者が見落としたであろう事実を読者に伝える機能をもち、さらに⑤作品に対しては控えめな立場にあり、その変更を迫ることは仮定ですらありえないものであるが、⑥批評は知性の条件を整え、その活動の場をつくるものと意味づけました。

そして20世紀中ごろになると、ルネ・ウェレック「文学理論、批評、歴史」(1955)は、文学理論、批評、歴史は相互に関連し、歴史主義的に規定されず、文学史を参照しつつ、個々の批評に言及する理論の必要性があると論述しました。またR.W.B.ルイス『アメリカのアダム』（1973）は、批評の抽象作用は作品の価値判断を示すことになっても、その対象を全面的に示すことはできないとし、一方では批評の理論が待望される反面、他方では一次創作物に対する補助的役割を示すにすぎないものとの古典的認識を繰り返しました。こうした主に欧米での一般的評価に対して、フランスは古くから「批評」の役割を高く評価し続けました。たとえばジャン・ド・ラ・ブリュイエール『人さまざま』（1688）では、批評精神が権威や規則を打破し、趣味や感覚・感情に訴える精神の洗練をうみだすことから、作品に対する批評は知識全般、理論的関心に拡大する有益性をもつものとされました。またヴォルテールは「趣味の神殿」（1733 ・ 1773）で、批評は趣味の規範が作用するが、この「神殿」に入れる読者は少数であるから、初めから読者を選ぶものとし、一次創作物としての文

学と二次創作物としての批評の関係を見直しました。一方、ジャーナリズム精神が芽生えたイギリスでは、S・ジョンソンが『ラセラス』（1759）において、批評は判断の原理を確立しようとする試みであり、目前の法則、意見を超えた真理をみいだす努力がなされるものと、あらたな価値づけをおこない、またサント・ブーヴ「文学的肖像」（1846）では、批評は客観性を基軸とする裁定機能をもち、教養をもって大衆を啓蒙し、美学的基準を離れて知性、感性的活動の総体となりうるとの科学的見地が付加されるにいたりました。こうした批評精神にかかわる実証主義的役割の発見は、20 世紀、さらにメイラー・レイニンガーの心理学的見地から文学批評への影響もみられました。それは作品にあらわれる本能、霊感、天才、など従来神秘的、秘匿的語らいでのみ体感可能な言葉に科学的意味を与えるものとなりました。一方、こうした影響は個人体験を人生、すなわち実存との関係において信念や信仰概念を見直すきっかけにもなりました。サルトル『フランソワ・モーリャック氏と自由』（1943）では、作品手法は作家のいだく形而上学的関心にかかわる信仰・信念にかかわるものとして再評価され、作家と批評家の精神性が、各々宗教性と科学性として対比されつつ、それはクロスオーバーされるのもでもあることが示されました。

では、日本では批評はどのように受容されたのでしょうか。西洋の影響から批評精神が芽生えたのが明治期でした。西周『百学連環』（1873）では、批評は文学を対象としその是非を審判し、評価する知的な領分にあり、鑑賞することにより発する審美的感覚を統べる術と評価されています。また坪内逍遥「梓神子」（1891）では、アーノルドの帰納法的批評の影響があり、①具体的作品に照らされた実証的行為を求め、②対象をあるがままにみる自然主義的客観を採用し、②作品の解明化のために、裁断（判断）を遠ざける傾向が顕著に表れています。それに対し森鴎外はハルトマンの影響を受け、演繹批評をいわゆる「没理想論争」（1887 年～）にて展開しました。また鴎外は批評において「純客観」はありえず、主観、理想が批評を左右するとの、自然主義に対する理想主義的対応をなしましたが、ドイツ哲学の影響を受けた高山樗牛はさらに進めて「文明批評家としての文学者」（1901）にて、歴史、真理、社会、国家を、個人、自我をもって評価する個人主義的文明批評の精神を強調しました。さらに島村抱月「近代批評の意義」（1906）では、美学批評、とりわけ英米美学的批評の心得から、批評を説明的批評、評価的批評、科学的批評に分類し、近代批評の定義として、①批評は知識と知性から発する、②好奇心に発し、知識を運用し、読者を説定（説服）するものであると意味づけました。ここに日本における近代的批評の基礎が定位されるに至りました。

こうして抱月以降、ジャンル批評がはじまり、批評が客観的批評、心理的批評に分類され、西洋における批評概念の規定が、文学のみならず、美学、哲学的に意味づけられて展開されはじめました。この変化は、ニュークリティシズム以降（米 1930～）、作家性、伝記、時代背景を重視せず、作品を自律的テクストとしてとらえ、日本でもとりわけ戦後、その構造・意味・象徴性などを解明しようとするあらたな批評活動へと発展してゆくことになりました。

## ２．批評の現代的意味づけ（※杉田俊介 https://book.asahi.com/jinbun/article/14633381）

では、批評活動は現代日本でどのように進展しているのでしょうか。少し長くなりますが杉田俊介氏の批評の定義を書きだしてみます。杉田によれば批評とは、①一対一で対象に対峙する関係性がある、書き手の素朴で孤独な営みがその原点であり、②もはや対象は小説作品に限らず、それはただ一人で、数多くの優秀な人間が関わった総合芸術のような巨大な作品にも向き合わねばならず、③その営みの一断面は、個の無力さと切り離せないものであり、既存の一般的な価値判断に頼れず、自身の美的価値を自らの言葉で創造し、産出しなければ

ならないものになります。また④その批評性はポリティカル・フィクションに応じた政治や社会の問題と大衆的な娯楽性を高度な次元で融合させなければならない局面にあり、たんに震災や原発、差別問題などのノンフィクション性を真正面から受け入れるだけでは済まないものであり、⑤とりわけ現代においてはSNSの機能に応じて、政治や社会に関する論じ方がネットユーザーの議論に火をつけ、それがさらに作品の価値にも影響し、政治的テーマであればこそ、その娯楽性、享楽の強度を高めていく情報伝達構造が堅固であることを意識しなければならなくなります。こうした構造は我々にメタ認知の意識化を余儀なくさせ、⑥現実と虚構が反転し合うその循環構造それ自体を批評しなければならなくなる再帰的遡行性、循環性をもつものへと進化しています。それは⑦批評の価値の相対化、文壇、論壇の自閉化、情動的攻撃性、批評の強度を切り崩す批評・批判のフラット性を鍛え、⑧扇動、動員、わかりきった言葉（紋切）とは異なる、閉鎖性、権力性、暴力性を暴き、解いてゆく自省、内省の力を育てることが期待されます。そのためには⑨研究者がジャーナリスティックな批評を担い、批評と研究の境目の融解を試みることが必要とされ、⑩社会反映論の喪失以後の印象批評をエビデンスベースの啓蒙的文学理論の導入へと導き、⑪科学主義、実証主義とは異なるあらたな問い、すなわち人文学のなかに新しい潮流（評価基準）を創造しなければならないものになります。ゆえに⑫現代は孤独・無力・不安感を既存の価値に怯えることなく立ち向かう「孤独な喜び」を育むべき時代にあり、⑬世間一般の流れ、社会的風潮に抵抗し、内省的な言葉を創造することが強く求められるものとなります。

## ３．批評なき「批評」が意味するもの

杉田氏の言葉は、もはや批評の近代的役割は喪失し、従来の批評による客観的判断、裁定は現代では通用せず、特にメンタリティ（気分）による価値判断の罪がとりたてて裁かれることが少ない混沌の時代に突入していることを物語っています。それはSNS、動画サービスの日々の惨状をみていれば容易に理解が可能です。それはいわゆる確証バイアスがエコーチェンバーによる同調性バイアスを強度化し、とりわけ現在では右派クラスタを生成、強化し続ける流動性に応じて、左派、リベラル、フェミニズムが排除されることにより社会は分断され、細分化され、人々が抽象的分析を経た普遍的価値観にたどり着けない盲目的なSNS難民になる傾向をうみだし続けています。彼らはもはや聞く耳をもてず、信じたいものだけをリピートする、ただ言葉の吐き捨てに反応する群化した存在になってしまったといえましょう。それは政党、企業団体が国民の草の根運動に見せかけて利害関係を拡散するビジネス手法である「アストロターフィング」により増強されています。こうした社会現象をみせつけられれば、この時代にあって批評活動はもはや無力と思わざるを得なくなる社会的リスクがますます増大してゆきます。

しかし、杉田氏が批評精神を捨てようとしないのは、批評が「希望の原理」を生むからであり、筆者の言葉に置き換えれば「平和、人権、共生」の民主主義的理念を最後まで捨てようとしない考え方、生き方につながっているからだともいえましょう。さすれば、彼の「批評」の定義を筆者の言葉に咀嚼すると、以下のような解釈をともなう言葉になります。①一対一、一対多、あるいは一対他の関係性をもって対象に接し、コミュニケートするときに批評精神は必然的に生れます。それは素朴で孤独、地道な営みであり、あらかじめ誰の目にもとまらないことを覚悟して言論活動、執筆にとりかからなければなりません。②批評行為には政治、社会問題を大衆的な娯楽性と高度な次元で結ぶ柔軟性、融通性、学際性が必要であり、それはテクスト（作品）、コンテクスト（社会）に限らず、あらゆる対象を批評の的とし、排除することはあってはなりません。③つまり社会における不都合な事実を隠蔽するような権力構造（政治とメディア）そのものに、現実と虚構が反転し合うような循環構造、その悪無限性をみいだし、批評対象としなければならないのです。こうしたメタ構造を意識化

しなければ、批評家自身が左右、貧富、あるいは日本人×外国人などの二項対立的思考をもって、あらたなイデオローグの虜になり、生権力を維持しようとする国家権力に飲み込まれてしまうのはもちろん、自分達の「自由と連帯」だけを「正義」と叫び、ネットから街頭になだれ込むSNS群衆のパワーに巻き込まれることになってしまうでしょう。ならば④批評は、戦争やテロ、ファッショによる暴動、大政翼賛に抗する自由なる力、社会の閉鎖性を解いてゆく内省の力に依拠するしか方法がなくなります。⑤そのためには批評と研究との相互浸透、すなわち研究者がジャーナリスティックな批評を担い、批評家が研究的態度、すなわち事実の積み重ね、事実ベースに基づく真理の探究を拒絶せず、そのスタイルを摂り込み、⑥たとえSNS群衆に無視、嫌悪され、憎悪されたとしても、一般大衆の理性なき妄動（ポピュリズム）に抵抗し、内省的な言葉を創造する姿勢が必要とされることを自らに問い続けることになります。それは人間の社会的家畜化に抗し、精神の自由の活路を開く個の力を育み、⑦そうした行為を重ねることにより、あらたな自身の価値評価、判断基軸を他者に、社会に、世界に示すものになります。それはまた常に独善、教条、蒙昧な言葉を慎重に取り除きながら紡がなければならない困難をともなうものになります。

こうした批評に対する期待は、批評・批判そのものがイデオロギー、デマゴギー、誹謗中傷、攻撃とみなされる時代風潮にあって、自分が攻撃対象とされる恐怖から、無関心を装い、差しさわりのない感想でお茶を濁す、依然尻すぼみの状態にあります。現にSNSには事実、的を射た批評ではなく、攻撃性の高いデマ、誹謗中傷目的のフェイク、嘘八百がばらまかれていますが、人々は自分の政治性、党派性、宗派性にあわせ、都度気分でその「事実」をつかみとっているにすぎません。何が事実かはさておき、自分の感性、政治性、宗教性にみあった事実こそが正しいものと、最初から疑いのない好意、反感をよせ選択行為をおこなって憚りません。こうして人々は批評精神を自ら手放し、風刺精神の枯渇、価値判断の停止、既成の支配的価値基軸に従い、無力感に苛まれる状況においこまれています。個人の価値基準を集団や組織、社会の流れに丸投げし、自身の価値基軸を鍛えてこなかった人々には、さぞ現在の混乱と破壊の時代が目の前に突然現れたかのようにみえることでしょう。だがそれは違います。なぜならば少なくともこの30年間の社会、そこに生きる人々の考え方と行動が文明病ともいえる自己家畜的人間を増幅させてしまったその結果が現れているにすぎないようにみえるからです。すでに社会に流通する支配的価値観（新自由主義＋権威主義的大国化）は馬脚を現している状況であるにもかかわらず、人々は支配者の合理的、合目的的価値にそう道具的選択から脱却することがなかなかできません。だからこそ生きるための生の価値（ウィータ）を見失った人々の中には、人間の生（アート）喪失を自覚し、技術（テクネ）の一元化を打開するための知恵、力、あらたな技術（アルス）をうみだそうとする人々も微々たるものですが現れています。ここに大衆芸術を乗り越えようとする純粋芸術と限界芸術の止揚が芸術家、社会運動家において芽生える条件が整うのですが、しかし、それは日本においてはまだ目にみえた社会現象にはいたっていません。

## ４．権力批判はなぜ無力化したのか―自己家畜化批判―

人間は社会的動物であるがゆえに、相互に快適な文明社会を生みだし、集団を維持するために文化を育み、「身内」を保護するがゆえに外敵とのコミュニケーションをとおした戦争と平和の時代を歴史的に繰り返してきました。こうした人類の歴史は、森岡正博『無痛文明論』を筆者流に解釈すれば、以下のような特徴をもつものとなります。人間は、

① 社会制度や文化的環境による快適さに慣れ、それに適応して権力に従順になる。
② 食べ物を自力でとらなくても育てなくともよい。取り主、作り主に依存していることを次第に忘れる。自分で食べ物を探す能力も養わなくてもよい。屠殺役を他者に託すことにより人間が「食物連鎖」にかかわっていることも忘れてい

る。

③ 自然の脅威から遠ざかる。温暖化をはじめとする地球環境破壊が進んでいるにもかかわらず、熊による被害は目立つものの、昔よりは天敵の襲来、干ばつや気候変動などの脅威から守られているために、自然への危機対処意識、実体感を見失っている。

④ 自らの意思あるいは強制により人種交雑（人為淘汰）し、居住を世界各地に拡大、繁栄させてきたにもかかわらず、一方では人種、民族差別を繰り返し、異民族間のコミュニケーションを忌避する傾向を強くし続けている。

⑤ 授乳と生殖の管理を文明の名のもとに科学、専門家、国家にゆだねることにより安全と安心を得ている。まさに生殺与奪をシステムの思惑に委ねて疑問を抱かない。

⑥ 文明化により身体変化がおき、動物的能力、特徴を退化させている。

⑦ 集団、組織、社会における被排除者（邪魔者）の存在を認知したうえで、その死をコントロールする技術、たとえば洗脳、自殺、虐殺などにかかわるテクネを、「無痛化」を前提に押し進めている。

⑧ 快適な生活のために労働を通した自発的服従を雇用主、組織、国家に託すことを厭わない。日本の大衆性のレベルからすれば、人間社会が家畜化を防ぐ手段としては最善である自由と民主主義の価値観と制度にすら依拠し自立して生きようとはしていない。

こうして人間は「痛み」を感じることを必要としない快適な生活をめざし、快楽を幸福と見間違うあまりに、国家、制度、機関にその命運を託すことに何ら疑いを抱かないことが当たり前になりました。人々は他者の痛みにますます鈍感になってしまったことから自己の痛みすら忘れかけ、社会はその痛みを自分のものに復元する回路を失ってしまったかのように思えます。ここでは「痛み」を忌避する心理が「痛み」を感じさせることなく快適に生きられる「無痛文明」を形成し続けていることがわかります。

あたらしい「戦前」がはじまった日本でも、人はなお自分の番がやってこない限り、他者の心身の痛みを自分のものにすることはできません。それは必然的に現れた文明病の重篤な症状であるといえましょう。では、こうした現代にあって、人々は批評が無力化し、風刺が無効化する現状から抜け出すことはできるのでしょうか。データは示しませんが、とりわけ日本の敗戦後の国土荒廃と貧困克服の過程にあらわれた高度経済成長時に登場し、日本の政治革新を担った都市生活者、とりわけ所得が上昇した中間層（新中間層）、ホワイトカラー層に着目すると「無痛化」が必然であったことに気づかされることになります。自治体住民が豊かな生活を実現することは、本来同時に税の公平分配をなし、貧困をなくすことが目的であったはずですが、豊かさを求めることが目的化してしまったために、住民は自己家畜化に気づかないまま 80 年代以降の社会を生きざるを得なくなってしまったように思えます。

それは生活上の各々の困りごと、個々の「心の痛み」を共感にかえて、政策に反映させる 1970 年代の革新自治体運動を巧みに利用した保守本流政治の限界でもあったといえましょう。もちろん、それは表面的にはリベラル左派のイデオロギーの影響下にあったようにも思えます。そうであるがゆえに、こうした物質的要求が飽和状態になる 1980 年代からバブル経済崩壊後はより「自己家畜化」の根は深く国民の心に広がってゆくことになりました。

人間の命の根がしっかりと地に張られていない政治は保革問わず、人の生命の根を腐らせてゆきます。バブル経済崩壊後、失われた（奪われた）30 年が続いているにもかかわらず、社会は見栄、拝金、かっこつけ、肩書や物欲に支配され、持たざる者はそれをもつ人々に卑屈になり、もたぬ人を軽蔑し、権力や権威に「お近づき」になることで自分のステイタスがあがったかのようにふるまい、勘違いするスノビズムを維持しています。そうした風潮や規

範などに対し、批評を交えるのではなく冷笑的に批判者をながめ、揶揄するシニシズムが、既成権力に飽き足らない参政党のような「疑似権力」を政治構造に住まわせる原動力になりました。それはさらにSNSの「ポリティカル・コレクトネス」批判を通して、一方的な「思想持ち」批判につらなり、かえってスノビズム（権力依存）を蔓延させる悪循環に陥っています。そうなれば自己家畜化現象に抵抗する意思はますます希薄になり、社会改善、改革への意欲は減退し、権力者に向かうべき批判的態度は逆に権力内のあらたな装いをした規範にとってかわられ、弱者には冷たく、権力者を失笑、嘲笑、冷笑の対象としない保守的判断が日常の社会規範に浸透するのを手助けし続けることになるでしょう。また他者を非難すれば自分が批判され、攻撃者、権力者を批判すれば仕返し（弾圧）が怖いことから、本来正当であるはずの批判者を「普通の人々」が侮蔑することにより自己防衛を果たそうとする外国人排外主義が現代日本社会を席巻するのは当然のことになりましょう。

さて、こうした長きにわたる保守政治、自公政権の悪影響は一段落しましたが、安倍政権下でひろがったさらに右にシフトした日本回帰的な極右権力は高市政権により維持され、支持者を活気づけるものとなりました。もはや事実とは関係なく、稚拙な政治認識を弄んでいることが明らかであるにもかかわらず、自由に事実、歴史をつくりあげ（捏造し）、その誤りを認めず、気に入らない者を敵対者とし、執拗な攻撃をおこなう人物がSNS、動画上では人気を博す時代になりました。しかもそうした逸脱行為を自らの幼稚な欲求不満の表明とは気づかず、その原因を左翼、リベラル、外国人憎悪にエスカレートさせるほどですから、当然自身の自己家畜化について認識できるはずはありません。それは自分たちが「極右」勢力であるにもかかわらず、「普通の日本人」を自認するまでに深刻かつ、平常心の末期的状況が現れています。

それは長い活字を生成AIの要約を読んでわかった気になり、SNSで目に留まる小泉流「ワンフレーズ」ポリティクスではなく、話の内容とは関係なく話題を無理やり攻撃対象者の「人格」の歪みに結びつける「トーンポリシング」、敵対者のわずかな誤謬をことさらに拡大する「アストロターフィング」にのせられ、ネット群衆を扇動する「犬笛吹き」を歓迎する態度にもみられます。そうしたインフルエンサーが日々、現れては消えてゆき、都度数万の支持を気軽に得られるような浮草が漂う社会が、いまや日本の常識も塗り替えはじめているのです。もはや批評精神のないところに諷刺精神がうまれるはずがありません。いわば現在の日本の状況は、国自身が戦後アメリカの世界秩序形成に即して自己家畜国家をめざしてきたその到達点にあるといってもよいでしょう。事態はもはや目先、小手先の「改革」ではままならない日本もまた世界史、文明史的な「曲がり角」に立たされていることを意味しています。それでも、こうした根本問題に気づく人は多くはなく、また気づいたとしても近隣の大国への対抗意識、敵愾心から見て見ぬふりをするか、あるいは自民党政治に飽き足らず極右政権ならば、自らの生活苦、不満を解消してくれるに違いないと「維新政治」と結びつき、少なくない人々がその誕生を歓迎し、あらたな夢を見て突き進む人々の群れに加わり、一気呵成に吹き上げるさまに生の充実感をみいだすものとなりましょう。

このような状況に対し、いったい批評は何ができるのでしょうか。わたしたちは今も自らが生きる集団、組織、社会をつねに客観視し、国家との距離を自らの視座、価値軸により鍛えなおす意義を、批評精神にみいだすことからはじめるしかありません。そして希望を捨てなければ、いつか人間は自己家畜化を回避する無数の回路をつくる知恵と力と勇気を作り上げることができるかもしれません。これからも世界は自らの安全、安心のために人間の自己家畜化を正当化し、快適なる「文明社会」を維持しつづけるでしょう。それは他者に、他民族に、他国に「家畜化」を強い、人道をもてあそぶ残虐な行い、過ちで満ち溢れることと同時進行で進んでゆくことでしょう。それでも人が人として、まっとうに生きるその命運を切り開く力は、たとえ国連が尽力し続け、法の力、教育の力が十全に回復、機能したとしても

最後には個々人の意思の力に委ねられるほかありません。それは決して即物的で安易な共感により生まれるものではありません。長いながい人類史を紐解くと、そのことを痛切に感じるときがあります。その意味において批評精神は、人が人であり続ける限り、過去、現在から未来を見通す力を育む唯一根源的な力をうみだすものとなりうる可能性を今も捨ててはいないと信じてほかならないのです。

**＜参考文献＞**


杉田俊介「批評とは何か？　「ポスト」クリティークが叫ばれる時代に改めて問い直す」https://book.asahi.com/jinbun/article/14633381。

杉田俊介『神と革命の文芸批評』法政大学出版局、2022 年。

林正子「〈文明開化〉から〈文化主義〉まで ： 明治・大正期〈文明評論〉の諸相」岐阜大学国国文学、2001 年、28 号。

林正子「近代日本における〈批評〉概念成立への道程・序」岐阜大学国語国文学、2003 年、30 号。

林正子「明治中後期から大正期にかけての評論におけるドイツ思想・文化受容の系譜【概論】」岐阜大学国語国文学、2005 年、32 号。

森岡正博『無痛文明論』トランスビュー、2003 年。


（こやま　まさひろ）